道の「善」を達成するために
――道教における神仙と道徳――

リヴィア・コーン
ボストン大学

問題の所在

中世の中国において、道教の修行の目的は神仙であった。神仙とは地球上での神秘的存在の悟りと、この世の身体から昇天した後に天上での地位を得ること、と言い表せる。この二つのレヴェルにおいて神仙であるということは、1）この世の限界を超越し、2）儒教で支配された社会で有効な「徳」と互恵制の普通のパターンを越え、3）人間と神または祖先との関係を規定した相互性の関係を飛び出すこと、以上の三つを意味した。仙人は、完全に自由で、独立し、自らの意志が強く、束縛、限界、境界がなく、自分が一人であることを、考えうる限り最高のあり方と捉え、誰あるいはどれとも関係を築かない。

それに対して「道徳」とは、人間関係を方向付ける原理であり、この世の人々やものに対処するための責任ある方法で、社会の中で良い人間になる道である。このように定義すれば、一瞥すると、神仙を悟り達成するうえで、道義の入り込む余地はあり得ない、あるいはあるべきではない、ということになる。そこで問題となるのは、中世の道教の教義達成において、道徳は何らかの役割を果たしたのか、そして果たしたのならば、どのような役割なのか、という2点である。

解釈の枠組み

伝統的な中国と道教の世界観に拠れば、この世とは根本的に善であり、生来的に調和する。急激な変わり目を経ることなく、純粋で形のない「道」からいくつもの変化の中で創造された世界とは、各々の力、存在が、この世の性格をもともと「道」の一部と認識するとき、あるいはしながら、完全な宇宙を共に構成する多方面の力と存在の、不思議で神秘的な組み合わせとして、この世は表れる。世界全体における全てのものと存在の協調というのは所与の前提であるが、特定の個人は、この世の「道」的性質を多かれ少なかれ認識できる。ということは、この世の中での「道」的性質の認識とは、善の達成と言うことができるのである。

しかしながら、宇宙のこの善は、様々なルールによって表現され、法律やその他の禁則によって強制されるような道徳的「善」とは、必ずしも同一ではない。宇宙の善は、人間的道徳性以上のものである。というのは、この種の善は広大無辺でありまた自然であり、体系的宇宙

も自然も時として残酷で不公平なものである。さらに定義できるような、或いは義務として守るべきような価値体系を持たない。『道徳經』に曰く、「天地は仁なく、以て万物を芻狗と為す(すなわち、わら製の犬みたいに、価値のないもののようにすべてのものを扱う)」と。同様にして、悟りに達した道の修験者、あるいは聖人は、天と地のようなもので、あまり仁がなく、時として人々を手荒く扱う。聖人が非道徳的という観念は、中世の思想家孫綽も繰り返している。孫綽曰く、聖人の行動は宇宙と同じ状態の時に行われる故、聖人は殺生を行うかも知れない。無心であるから、聖人は個人的、執着した、自己関心的な意図がない故、したがって、俗人の犯した行為と同じような行為であったとしても、聖人のすることは何でも、暴力的衝撃を残すことはない。

天地は確かに仁ではないけれども、人間が内的調和と安寧の感じとして、直感でわかるような、宇宙の根元的な善は存在する。特に道徳的ではないとしても、人間の限られた感覚的、知覚的機能でもって、もしこの善が達成されるならば、それは、特に全ての存在への愛と思いやりに関する道徳的指針として表される。道徳とは、悟りを開いた道士が具現化する宇宙の調和の一部であり、この世における彼の存在は彼を取りまく生活の道徳的質を増大させる。とはいうものの、仙人はそれ自体道徳のものではない。むしろ、宇宙的存在の自然発生的意味において、人間社会の要求を越えた、「超道徳」である。

これらを考え併せて、伝統的中国の世界観における道徳の四つのレヴェルを区別したい。一番下位で最も基本的なレヴェルを、「普通の道徳」と名付けたい。これは特定の徳と行動様式によって明確に定義された社会内互恵制の儒教的意味である。それは厳格な階層的環境の中でおこる。ここでは、社会的に定義された道徳的善を悟り、社会内での所与のパターンに基づいて個人とグループが交流する。

次に高次のレヴェルは、私が「菩薩的道徳」と呼ぶものである。このカテゴリーには、何も見返りを期待せずにいいことをするように教えるという点で、互恵的ではなく一方的な徳も包含するような、世の中へのより利他主義的、非自己中心的な姿勢が含まれる。思いやり、愛、寛容さ、社会内というより人の中の理想を現実にする全てのものへの寛大さなどが徳といえる。菩薩的徳の修行者は社会の階級構造の外に自らを置くが、純粋に非利己的な善のもとにとられる彼の行動は全ての全体的安寧と調和に大きな影響を及ぼす。ここでの基本的パターンは互恵的なものというより、衝動と句応、感應というものである。即ち、菩薩修行者は純粋の愛を衝動として与え、社会がよりよい調和のとれたものになる、ということでその反応を示す。

第三のレヴェルは、仁でなくそして儒教的社会の普通の道徳を否定するようなあり方、孫綽または『道徳經』の聖人である。このレヴェルを「無道徳」と呼びたい。ここでは、社会の規範や制限から完全に超越し、一人で全体に対峙し、その世界に対し主体的に行動するようなひとりの個人が存在する。その行動は宇宙の啓示をうけ、万物のよしとするところを目指し、と同時に、仁性への深い配慮または思いやりの意識なく、苛酷で急進的であるかも知れない。

第四の、そして最後のレヴェルとは、完璧な道教の仙人の位置する、道徳的地位であり、それを「超道徳」と呼びたい。体系的宇宙と完全に一つになって、仙人はひとりで存在するが、そして彼の思想や行動において世の中や社会とは対抗しない。すべての理性ある意識から離れ、

世界を動かすことになんら影響を及ぼさず、ただ単に流れに沿って流れ、彼の経験する世の中の内的調和を喜び、その中に完全な自由を見いだす。

ではこれら四つのうち、最後のレヴェルに到達するために、道教の仙人は三つのレヴェルにどのように携わり、また反応しているのだろうか。現実には、この世の中とどう交流しているのだろうか。もしあれば道徳はどの場面で出てくるのだろうか。

この問いに答えるため、以下の三つの違った種類の資料を見てみたい。

1：仙人の伝記、伝説的記述、それらには、比喩的、間接的な言い方のみで普通と菩薩的道徳が言及され、道教における超道徳達成が示されるような伝統がその理想的な信者をどのようにみているか、に関する考えが含まれる。

2：天上での「位置」とそれによって決まってくる仙人の特質、その特質とは、世界的顕示において完成された理想が如何に菩薩的徳を具現化するか、を示した、肉体的なものだけではなく道徳的な特質を定義する。

3：中世のマニュアルに示された仙人になるための叙階のための条件、例えば、どのような人が仙人になるための修行に入れるのか、またそういう人から期待される行動パターン、そしてこれから仙人になろうとする人が、後に天上だけではなく彼らを取りまく社会においても、どのような位置を占めるのかに影響するような、強い菩薩的な道徳を培わねばならないことを示すものである。

仙人の伝記

仙人の伝説的伝記に拠れば、道徳は二つのレヴェルにおいて役割を果たす。一つは神仙になるための修行の資格要件として、もう一つは神仙を達成した者の行動の一側面として、である。仙人は潜在的に超道徳的であり、宇宙的存在であるが、弟子として入門を許される前に、また修行を始める前に、彼等の性格にある種の道徳的な質の存在を証明せねばならない。古代と中世後期文学の色々の話がこの事実を記録している。それらの資料の中で、八仙の筆頭で、十の試練にさらされた呂洞濱の伝記が最もポピュラーで詳細である。ある試練では彼は全ての持ち物を乞食に与えた。また別の試練において手練手管でひとをたぶらかす美女にあらがった。さらに別の試練では、ヒツジの一群を守るため、自分を虎に食べさせた（『増象列仙伝』13 a）。

これらの試練は、呂の物や社会的習慣への執着、また彼の死に対する恐怖や弱いものへの思いやりなどを試している。高くそびえ立つ仙人は、自分の所有物に対して物惜しみしてはいけないし、社会が認める習慣からも一線を画していないといけない。また死や脅し、誘惑に直面したときの勇気と、弱者のために自らを犠牲にする意志を持たねばならない。これらの道徳的な徳は道教的だけではなく仏教的でもあり、また後の全真派でも要求された。これら徳はそれ自身のためや人の特定の道徳的なタイプのために必要とされたのではない。むしろ、神仙を達成する過程で身体と自身の絶対的克服に必要な個人的決意の現れとして捉えられた。道徳的価値は、内的な強さの表示として、修行の始めでは必要だが、それは上記の理由故に理想の中心ではなく、むしろわきへ置いておいて、人間としての一般的特徴と普通の生活の他の全ての側

面と一緒に克服されねばならない。

もう一つのレヴェルにおいて、他者のための思いやりの形をとる道徳は、この世における仙人達の行動の一側面として表れる。天上への昇仙の前と後で、仙人でない人々の間に現れ、彼等の病を治し、悪魔祓いをし、長寿のための知恵を授け、あるいはこの世により増大した美の感覚を足して、仙人でない人々を助ける。これらの活動は非常に多くの話で記録されている。例えば『列仙伝』では、馬師皇として知られていた人が、広くまた遠くの動物を治療し、一度は天上の龍を激烈な歯痛から救った。『神仙伝』では、壺公と呼ばれた人の話がある。彼は完全な神仙を達成する試験には失敗したが、それでも地上では強い悪魔追放者になることはできた。彼が行く先々どこでも、恐い怪獣が震えるゼリーになってしまった。『神仙伝』でもうひとつ、渡り職人の左慈は、遠くの場所からの最も素晴らしい食べ物を一瞬のうちに作ることができた。

独特のやり方で人を苦しみから助け、この世をもっと楽しいところにかえながら、仙人は抑制から逃避するためと帝国の役人達をからかうためにその魔力を使う。よって、一生懸命努力し、自分たちに本気な地上の民達のために、喜びと笑いの鏡をかざす。従って、生けるものへの思いやりは、人間を苦しみから救うだけでは、実現に至らない。目的や目標のないところに究極的に導くエネルギーの消費、単に神経質な混乱と緊張として現れるこの世の全ての争いと願望を、天上の限りない自由の見地から、俗人に見せることで、思いやりを現実にする。仙人の伝説的伝記に拠れば、すべての道徳と社会的責任を超越し、もっと楽しい生き方を人間に示しつつ、気まぐれまたは個人的決心と真価の現れとして、普通のまたは菩薩的道徳を実践する。

天上での「位置」

中世中国の道教の悟り達成に関して、仙人の骨をもった人のみが道教の教えに出会うことができ、修行に成功する、という理解がある。この教理は、特定の身体的精神的特徴とともにきまってくる天上での様々な立場として現れる。というわけで、前世に積み上げた功績（道徳的功績）によりのみ、人々は仙人になるよう運命づけられる。また、神仙になる目的を究極的に達成できる人は天上でその名が既に「登記」されている、と五世紀の『後聖道君列伝』は記している。さらに、天上で承認された者は、その生理的道徳的性質からも認識される。例えば「生有金閣玉名者則眼有日光青歯白血其為人也則仁慈而樂仙明頴而秀挺（金閣に玉名ある者は、則ちその目に日光があり、青い歯を持ち、純粋な血を持つ。仁慈あり、而して仙を楽しむ。聡明で多才、而して優秀。）」

その他の者は、背中と胸に星座が記されており、さらに重要なことは、彼らは「寛大で他人と調和しやすい性格で、他のもの、昆虫や芋虫でさえも大切にする。」「控えめで注意深い性格で、完璧を真に愛す。」「純粋で明確で、全ての冒とくとは、関わらない。」「生いるもの達と一緒にいることで興奮し、考え方は柔軟で、そしてきらめく明るさでいっぱいである。」気前の良さ、人類愛、年長者を「自分の母であるかのように親愛をもって」特別に扱う、幅広い思いやり、多くのものに対する慈悲、貧しいものへの愛、危険にさらされたあるいは困難に陥った

人々への積極的援助は、仙人が体現するその他の道徳的価値である。最も一般的には、真の仙人は「彼等の身体は純粋で精神はクリーン、彼らの全体的存在は芳香が湧き出て、穏やかにする。」と同時に、彼らの考えは寛容さと思いやりで満たされている。

神話という形式においては、天上での定められた位置を占める仙人によって自然に実現され、同時に実践される菩薩的徳の理想を文章の上では表している。他に対し真に慈悲深くまた人がよく、最大限の菩薩的徳を生かしている者だけが、真の仙人である。

道教法師叙階のための条件

紀元620年頃の道士の修行と道教の叙階のためのマニュアルには、より具体的で実践的な様式で、前述と同じ考えが表されている。六巻十八部から成る『奉道科戒』の内、第二巻に含まれる第7部の標題は「聖職叙任のための条件」である。本文は、どういった側面においてどのような人が道教の厳しい修行に入門が許されるか、あるいは許されるべきか、という、違った長さ（5項目から30項目）の七つのリストから構成されている。まず第一に、遺族の生まれであるとか、道教の実践に情熱的であるとか、12の好ましい社会的個人的特徴をあげる。次に、誠実で敬虔で、また憎悪やこの世の争いから完全に離れた人など、法師に叙任されるような25の人のカテゴリーをリストする。その後、内容の方針が逆になり、色々な犯罪者、障害者、発狂者など10のあってはならない対象と、憎悪に満ちて病みつきで道教に対して否定的な感情を持つ、法師に叙階されてはならない25の人のカテゴリーをリストする。

30項目あるなかの第五のリストは、すぐにでも法師に叙階されるような人の特徴に焦点を当てる。例えば、世俗的な冒瀆からの離脱している、道教への積極的献身、歓喜と陽気、加えて、前述の神話的叙述と同様、寛容さ、他を助ける積極性、思いやり、そして親切さである。その次に本文に出てくるのは、法師に叙階された後、仙人になるための適切な進歩を確実にするため、従うべき振る舞いのあり方の五つをリストする。ということは、道教の信者は常に、道教に献身的で、正直で、高潔で、率直で、全ての行いにおいて徳を実践し、現在に留意して、自分自身を熟知し、そして全てのことにおいて「善と可能性を十分」発揮し、全ての存在のための利益を守る。

第7部の最後の三つのリストは10、25、30項目から成り、否定的な調子に戻ってしまう。そこでは、自己中心的欲求や悪い意味で計算高い考えなど、道教的行為を完全に不可能にしてしまうような条件を第一に記している。次に、利欲的、ごまかし、横柄、傲慢など、どのような条件においても絶対してはならない禁止事項を掲げる。最後に、（道教の修行の）進歩を絶対的に不可能にするような類の行為を略述する。

本文中は繰り返しが結構多いが、要点は明確である。即ち、道教徒になるため、また叙品された同志達の神聖な共同体に入るためには、家族背景が良くなければならないし、道徳的に高い器の人物でないといけない。そうなるためには利己的な欲求と否定的な態度を克服し、教徒に菩薩的徳を実現し、思慮深く、思いやりをもち、寛大で慈悲深くなるよう勧める。法師になるための具体的条件が天上で占める位置の神話的理想と対応すると同じうして、仙人になる道

はまず利他的で非自己中心的な生活を行うことである。自己を排したやり方で良い人間であって初めて、全ての道徳的カテゴリーを超越するような、宇宙の善を達成できるのである。

結　　論

中世の道教において神仙を達成するということは、個人的及び社会的理想を克服し、儒教的菩薩的道徳を超越することを意味する。まず、互恵制に全体的に基づくシステムと、社会的階層関係と適当とされる形式による精神的支えから修行者を肉体的感情的にそしてより精神的に引き離す。道教の修行を全うするには、教徒は彼等の家や家族を後にして、この世から完全に自分たちを引き離してしまう。それで、道教の天上の神々に他の人々より修行者を近づけるような黙想と視覚化に入るための、長期の断食と禁欲修行をふくむ厳しい訓練を行う。天人、仙人になるということは、道徳も含め、人間であるという全てのことを超越することを意味した。しかしながら、この越えるということは、道徳の過激な否定を意味するのではなく、全ての存在に対して利他的で思いやりのある態度をとることから始まり、全ての道徳的価値を完全に超越する所まで行く、という変容にむしろ関わってくる。

とはいえ、既に神仙を達成した仙人の超道徳は、菩薩的善の側面をまだ一部残しているし、『道徳經』や孫綽によって公式化された非道徳の極端さにまで及ぶことはない。宇宙は究極的には善であり、他者に対して優越する一人の力として具現化されることは絶対なく、全ての存在の流れと一緒に、陽気で朗らかな自由さのなかにその宇宙は表現される。確かに仙人と非道徳の聖人は共に超然としており宇宙的調和に関して強い直感力を持つ。しかし仙人は急進的又は暴力的に行動できないし、してはならない。どちらかというと菩薩の思いやりと寛大さを施しながら、すべての善のために常に動かなければならないのである。